

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | カロザスの事績   |
| Sub Title        | On the works of Rev. C. Carrothers  |
| Author           | 会田, 倉吉(Aida, Kurakichi)   |
| Publisher        | 三田史学会   |
| Publication year | 1963  |
| Jtitle           | 史学 Vol.36, No.2/3 (1963. 9) ,p.41(153)- 59(171)   |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            | 松本芳夫先生古稀記念  |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19630900-0045">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19630900-0045</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# カロザスの事績

会 田 倉 吉

- 一、布教のための努力
  - 二、著訳書の出版
  - 三、キリスト教界で果たした役割
  - 四、教育上の活動
- むすび

一

ここにいうカロザスとは、明治二年六月（一八六九年七月）に来朝したアメリカのプレスビテリアン宣教師クリストファー・カロザス（Christopher Carrothers）のことで、かれについてはすでに本誌「史学」の第三十卷第三号（昭和三十二年十二月刊）、第四号（昭和三十三年三月刊）、第三十一卷第一—四号（昭和三十三年十月刊）に、「慶応義塾のカロザス雇入れについて」、「カロザスの経歴と人柄」、「カロザスの慶応義塾に対する影響」と題してそれぞれ拙稿をかかげてきたが、本稿はいわばそれらのしめくりとして、かれの在日中における事績をまとめようとするものである。そして、あわせてその後に目にふれた諸資料をも紹介し、右の拙稿の不備をいささか補正したいと思う。

カロザスの帰国あるいは死去の年月についてはいまそれを詳らかにしないが、少なくとも来日以来二十数年間は、宣教師もしくは語学教師としてかれは日本ではたらいっていた。そこで、以下それらの各分野にわたつてかれの事績を略叙してみよう。

まず、宣教師時代の事績には、第一に布教のためのはたらきとして、たとえば築地の宣教師館(明治三年完成)や礼拝堂(明治五年献堂式挙行)、耶蘇教書肆(明治六年開店)等の建設などが、かれの仕事としてあげられ、それらは同地の外国人居留地六番に建てられたが、「東京市史稿」港灣篇第三(六六二―三頁の間)挿入の図によると、場所は海岸に面した三百七十九坪七合の一劃がそれにあつてゐた。カロザスは日本にきて間もなく、その年の八月に横浜から東京へうつり、そしてこの「外国人居留地六番屋敷」に住んだわけで、同僚ヘボン(James Curtis Hepburn)が本国のウォルター・ラウリーに宛てた一八七〇年(明治三年)の書翰を見ると、五月十九日付のものに「カラゾルス氏の家を建てる金」について言及され(高谷道男編訳「ヘボン書簡集」、二二二頁)、また八月十五日付では、「この江戸の宣教師館の建築は、カラゾルス氏の監督のもとに建築中で」、「きたる十一月までには完成したいとのぞんで」いる旨がしるされ、自分はまだその家の敷地を見てはいないが、「建築費は二千ドルを超過しないと思ひます。」(同書、二一五―六頁)と報じられている。もつて、その建設の概況をうかがえようが、あに居室のみならず、明治五年かれは同地に礼拝堂をも建立して八月一日に献堂式を挙行し、さらに石造の書庫まで普請して、耶蘇教書肆と号し翌六年三月十七日から開店したのである。

もつとも、やはりヘボンの一八六九年(明治二年)十月二十六日付ラウリー宛書翰によると、最初ヘボンとカロザスとは一緒に江戸にミッション支部を設ける準備をするよう指命され、とりあえず一カ月十五ドルの日本家屋を借りうけて、二カ月ほどかけ二百ドルばかりの修理、改造をほどこして使用してゐたらしく、いずれは土地を買つて家を建てること

が望まれていたもので、六番屋敷の建築は明らかにそのあとのことであるが、それはともかくとしても、この日本家屋の修理、改造に際し、その指図、監督にはこれまたもつぱらカロザスがあたつたようである（同前書、二〇九―一〇頁）。あるいは、カロザスはそういう面に多少とも得手であつたのかも知れない。

では、かれによつて建てられた宣教師館や礼拝堂、耶蘇教書肆等の模様はというと、これはさきに拙稿「カロザスの経歴と人柄」にもひととおりに述べておいたところであるが、カロザスの弟子の一人で明治七年にかれから洗礼をうけた原胤昭が、懐旧談「基督教古文献売出し時代の思ひ出」（昭和七年六月九日「福音新報」第一九一―二〇号所載）のなかで、次のように語っている。「館は東向き角より北へ並び四五間に六七間の平家建の棟が、日曜日集会の会堂であり、平日はカ夫人の英語教場であつて、室内は履き込みの板床、五尺長の腰掛けが並べられて」おり、また書肆の方は「南西に面して、横町に並べて、頑牢な石庫、一尺角の伊豆石を以て築きあげ」られた「二間に三間位な二階蔵」で、火を恐れて戸前口を小さく低くしてあつたため、「カ氏の身丈けでは幾度も頭を打つた」と。また、この記事を収録する佐波亘編「植村正久と其の時代」第四卷（八一頁）にはその建物の写真までが載せてあつて、今日からすればもとより取りたてていふほどのことはなにもないが、それでも当時の日本人たちにとつては、いかにも「眼新しい西洋館」（「基督教古文献売出し時代の思ひ出」、同書、七六頁）としてうつり、あるいは「美々敷宅ヲ造リ」（後述の「東京邪宗事情」とか、あるいは「高大美麗ナ家作ヲシ」（「鉄炮洲六番書庫日誌」明治六年四月十一日の項、小沢三郎著「幕末明治耶蘇教史研究」、三六六頁）とか報じられたりしたものである。

のみならず、こののちここを根拠に、数年間にわたるカロザスの布教上の活躍がくりひろげられたのであつた。かれがこれらの宣教師館や礼拝堂、耶蘇教書肆等を建設した明治三―五年という時期は、実はまだいわゆる切支丹禁制の高

札が撤去される明治六年二月以前のことなのであるが、それにもかかわらず、カロザスはそこでさつそく熱心にバイブルの講義をはじめ、かつその販売普及に意慾をもちやっていたのである。現に、明治五年正月の諜者(豊田道二カ)報告「東京邪宗事情」や、同年十月の同じく諜者(豊田道二)報告「東京横浜耶蘇教事情書」等に見られる左の記事は、それらの状況を如実に語っているものといえよう。

一 築地居留カルロデス亜米利加ヲハヤロ産 四年前ヨリミシヨナリー法教ヲ弘ムル為ニ外国ニ送ルル人名トシテ日本ニ来東京ヲ住所トシ美々敷宅ヲ造リ夫

妻共ニ務メテ和語ヲ学ヒ一節英語教授ト称シ書生ヲ集メ盛ニバイブルヲ講セシニ洋学書生バイブル素読制禁ノ令アリシ其時バイブルノ外教ヘズト云フ則ヲ立テ日曜日ノミ講教セリ夫故一度書生ノ員数減シタレトモバイブル懸望ノ人十一二輩其後追々忍ンテ来リ今日ニテ凡二十輩アリ(「東京邪宗事情」、「明治文化」第十六卷第十号、昭和十八年十月刊所載、小沢三郎「慶応義塾御傭教師Cカロゾルス」、一五頁)

一 カルロデス近頃学校ヲ建立シ当十五日ヨリ開講毎日バイブル而已教授スル由又書庫ヲ建テ宗書ヲ國中ニ売捌ク卸シ所トスルノ志願此頃普請最中ナリカルロデス云ク此地日本ノ大都ナレハ法教モ此東京ヲ本トセネハナラヌ(「東京横浜耶蘇教事情書」、同書、一五頁)

そして、これまた同じ諜者による「東京横浜邪宗門事情書」(同前書、一五頁)の一節を見ると、いよいよ八月朔日の献堂式当日には横浜からもシレー、ブラオン、サエル、タムソン、バラ、ピヤソン、プラインら数名の宣教師が来たほか、信徒三十余人が相会し、さらに築地居留の外国人やその他の日本人たち多数が集まって、福沢塾(慶応義塾)から来たものだけでも二十余人を数えたといわれ、盛大な開教式が催されたとある。また、耶蘇教書肆の開店は実際には高札撤去のあとになつたとはいえ、なお一般には多分に禁教の気配の抜けきれない時期に、カロザスは持ちまへの気性でしきり

に強引にその売りさばきにつくしたらしく、前掲の原胤昭の懐旧談（「基督教古文献売出し時代の思ひ出」）によれば次のごとくその一端がうかがわれる。文中の「奥野先生」とは、いうまでもなく奥野昌綱を指す。

さて、私が、初めて、此の石庫へ這入った時に、ウンと積み込んで有った本は、古文献歴史から云へば、ヘボン、ブラオン、奥野先生に依て馬可伝が漸く刊行された時だ。類書では、半紙四ツ切り茶色表紙の「わらべてびきのとひこたへ」などが、奥野先生の板下で木板手摺ものが出たが、中々容易に製本が出来ない。それはまだ、国禁は解けても、職人たちが、気味を悪がつて引受けない。ヘボン先生やブラオン先生の屋敷の構内の小屋で、内証でやると云ふやうな事だったので、石庫へ積込むだけの品は出来なかつた。

此の時にカ氏が、どうぞ売つて下さいと強りに歎願して云く

あなた金有ります。わたくしかねちようだいな。あなたみんなかへ

なんぞと、私を石庫に入れ、戸前口に自分は立つて聖書の押売だ。（佐波亘編「植村正久と其の時代」第四卷、八一―二

頁）

## 二

一方、キリスト教禁制の高札撤廃についても積極的に尽力して、同僚の前記ヘボンやタムソン (David Thompson) と連名で、本国のラウリー宛にこのことに関する一八七一年 (明治四年) 六月十七日付の声明書を発し、ミッション本部に訴えてアメリカ政府を動かし、その実現をはかろうと願つており（「ヘボン書簡集」、二二九―三二二頁参照）、そのうえ、後述のようにつとに私塾を開いて子弟を教えもすれば、自派の教会を設立もし、さては前記の原が明治七年はじめて日本

人の主催するクリスマスを行なつた折には、その指導にもあたるなど(「植村正久と其の時代」第二卷、五〇七頁参照)、多様な活躍ぶりがうかがわれるが、それはしばらく措くとして、次に、同じく布教上の活躍の一部として、教義に関するカロザスの日本語訳の著訳書について紹介しておきたい。

前項に引用した譯者報告中、「東京邪宗事情」のなかに「夫妻共に務メテ和語ヲ学ヒ」云々なる記載が見られるが、これは一つにはカロザスが少しでもはやくわが国の風になじもうとした努力のほどを示すものといつてよく、それがとりも直さず布教の実をあげるための手段でもあつたと見て差支えあるまい。カロザスの日本語の教師は「第一番の求道者、後には日本橋日基教会の名牧師となつた北原義直」(原胤昭の懐旧談、前掲書、八四頁)で、結構少しは日本語がわかつたらしい。しかも、それでカロザスはカロザスなりに、教義に関しての日本語訳の著書をいくつか公にしている、これまでに確認し得た限りでもその数は左の五部十一冊に及んでいる。

- 1 「まことのかみのおしへのよあけ真神教曉」(和装、木版、三冊)、明治六年十二月二十五日刊(ただし、卷之三の奥付には「明治八年乙亥四月発兌」とある)

イギリスの某女史原著の訳本ということで、見返しに「東京築地六番 カラザルス嘉魯日耳士氏著」とあり、たとえ「第一章人体に付ての談」ひとのからだの冒頭を「こども子供衆達よお前がたは空に在る天日を御覽だろが彼を誰が彼所に置ましたか」と書き出しているといつたようなもので、総ふりがなはしてあるものの、全五十三章にわたり全般に読みにくい扁体がなが用いられ、文体もいかにも古めかしい。

- 2 「天道溯原解」(和装、木版、三冊)、上、明治七年六月刊、中、同年九月刊、下、同年十一月刊

ながく中国にいて、北京大学の教頭になつたといわれるアメリカ人ウィリアム・マルティン(丁睦良)の著書を

訳解したものであるが、実は「カラゾルス訳とあれども邦人の手になれるもの」（植村正久と其の時代」第五卷、四八〇頁）とされ、その日本人はこれも原の言によれば加藤九郎だということである（「その時代のこと一二」、「新旧時代」第二年第四・五冊、大正十五年八月刊所収、一九頁および「植村正久と其の時代」第四卷、八九頁）。加藤は新聞記者として当時きこえた人で、みづからキリスト教徒ではなかつたが、その研究にたずさわつて、外国宣教師に日本語を教えたり、翻訳を助けたりしていたのであつた。しかし、見返しに原著者名にならべて「嘉魯日耳士訳」とあるのはたしかで、原著はひろくわが国に受けいれられ、のちに中村正直の訓点をほどこした「天道溯原」とか、あるいは別に「啓蒙天道溯原」といつたものも出ている。（なお、岩波書店刊「西洋人名辞典」三七九頁に、この書の刊年を一八七五年としてあるのは誤である）

3 「耶蘇教大意」（和装、木版、二冊）、明治八年一月刊

卷之一、卷之二ともに見返し、奥付に「嘉魯日耳士蔵版」とあり、第一頁に「米國 嘉魯日爾士著」<sup>カローツルス</sup>とある。

4 「性理略論解」（和装、木版、二冊）、明治八年四月刊

これも2と同じく丁躰良の原著を訳したもので、原著者名にならべて「嘉魯日耳士訳」とある。

5 「略解新約聖書」（和装、木版）、明治八年十二月刊

見返しに「米國嘉魯日耳士閱」とあつて、正確には訳者がほかにいるわけであろうが不詳である。ただ、たとえば豊田実著「日本英学史の研究」中の「基督教聖書和訳の歴史」（七〇二頁）を見ると、「明治八年には米國嘉魯日耳士<sup>ゾルス</sup>の略解新約聖書馬太が出てをり」とあり、また「明治文化全集」第十一卷（宗教篇）所収の「宗教関係文献年表、（三）基督教（主として新教）の部」（五五六頁）には、これと同じ年月の刊記で「略解新約全書（馬太伝）」というの



があがつていて、それには「カラザアス、加藤九郎共訳」としてあり、これらをもし同書とすれば、ここにもまた2の實の訳者が関係してくることになる。同様に、比屋根安定著「日本基督教史」第四卷(二二二頁)には、これについて「米国人カロゾルスが嘉魯日耳斯と称して、明治八年に『略解新約聖書、馬太』を出版した。「福音書馬太述」と題し、「英訳ニ依テ重訳スト雖モ、原本希臘ニ照準テ異同ヲ較訂シ、採字ノ如キハ支那上海ニ於テ適用ス」と序した。漢学者の助力に基いたらしく、訳文は漢文口調であり、訳にして註を兼ねたものである。」と述べている。

このように、とにかくカロザス名義の著訳書というものが少なくともこれだけは実在するし、そのうえ右の2の奥付には近刻として「神道総論解」、「天路歷程解」、「両友相論解」の三書があがつており、1の卷之三および4の下の奥付には「真神教曉全三冊」、「天道溯原解全三冊」、「性理略論解全壹冊」、「神道総論解近刻」、「長遠両友相論解全壹冊」、「嚮道伝解全壹冊」等の書名が見られ、さらに「日本基督教史」第四卷(二四五―六頁)には明治七年刊として「聖教会問答」、「聖書聖教書類目録」、明治九年刊として「馬可略解」等の書名もかかげられている。そして、それらのことごとくが必ずしもカロザス自身の手になるものか否かは別としても、このことはたしかにこの数年間におけるカロザスの布教のための努力の一面を語るものであり、かつそういう点でのカロザスの地位をもまた示すものと思われる。

## 三

それから、カロザスの宣教師時代の事績としては、さらに主要なものとして、日本長老会の組織(明治六年)とか、東京第一長老教会の創立(明治七年)およびそれから分離しての日本独立長老教会の創設(明治九年)とかがあり、それらはか

れのキリスト教界で果たした役割や、宣教師間における立場を知るうえに逸することのできない事からである。まず、かれがアメリカ、プレスビテリアン伝道局の訓令をうけてヘボンらと日本長老会を組織したのは明治六年（一八七三）十二月三十日のこと（この日付は山本秀煌編「日本基督教会史」四一頁によるが、ヘボンの一八七四年一月三日付書翰には「本月二十三日」に組織したとあつて、疑問をのこす）、しかもそれは明らかにタムソン一派の無教派主義との対立を示すものであつた。

そもそも、はじめてわが国につくられたプロテスタント教会が日本基督公会であつたことはいうまでもあるまいが、それが設立されたのは、切支丹禁制の高札撤廃の前年にあたる一八七二年の三月十日（明治五年二月二日）なのである。そして、その教会はアメリカ長老教会やオランダ改革教会の宣教師たちによつて支援されたが、たとえ組織は長老教会の制度をとつていたにもせよ、それはいずれの教派にも属さない独立自治の無教派主義を標榜する公同教会であつた。しかるに、いよいよ高札が撤廃されると、新しい教派の代表者がぞくぞく来朝してきて、日本伝道の有望なのに着目し、それぞれ自派の教会をたてようとする傾向を見せ、その結果、改革派の宣教師たちは依然こぞつて公会に協力しようとしたにもかかわらず、長老派の宣教師の間は二分して、タムソン一派の公会支持に対し長老派の教会建設を主張する立場が別にあらわれたのである。つまり、カロザスの一派がそれで、一八七二年九月二十日（明治五年八月十八日）から六日間になつて開かれた横浜での第一回宣教師々師会には、もちろんかれも同派のヘボンやルーミス、ミラーらとともに参加し、いったんは公会の組織をみとめたものの、一年余にしてそれとはなれた行動をするにいたつたわけである。それかあらぬか、カロザスとタムソンとは個人的にもどうやらあまりしつくりした仲でなかつたようで、カロザスは右の長老会を組織した直後の一八七四年（明治七年）一月二十二日付のヘボンの書翰によると、「タムソンはカラゾルスとは一緒に働けないので、どこか外のところでカラゾルスと離れたいと言つていますが、」云々（『ヘボン書簡集』、二五七

頁)と報じられ、また公会設立以前の二一八七一年(明治四年)六月十六日付および同年八月二十三日付の、やはりヘボンのラウリー宛書翰においても、当時たまたま世界漫遊の旅にでかける日本青年一行の通訳となつてタムソンが帰米することに関連し、そのためカロザスがまつたくひとり江戸にのこされることになるのに、かれはむしろそれを喜んでゐる様子だとか、しかのみならず、それはどうもカロザスがすすめてそうさせたものと思われ、ヘボンとしては賛成できないなどと報じた個所もうかがわれる(同書、二二七、二二三頁参照)。

ただ、タムソンの無教派主義に反対したのはヘボンといえども同様で、ヘボンは公会設立以前にあつてすでに、タムソンがとかく改革派のバラの公会主義に影響されているのに批判的で(二一八六八年七月二十五日付、ラウリー宛書翰、同前書、二〇三頁参照)、ことに、横浜について一八七三年(明治六年)九月、東京にも公会が設けられ、タムソンがその牧師にあげられたことについては、「多大の感化力をもつていた唯一の教職タムソンがわたくしどもを棄てました。」(一八七四年一月二十二日付書翰、同書、二五五頁)といい、「タムソンとミラーとはバラの味方で、どのミッションにもたよらない無教派の教会に賛成しました。もつとも教会組織は長老派でありました。ルーミスとカラゾルスとはわたしども長老ミッションに關係し、そして伝道協会の援助を受けて教会を設立することに賛成でありました。」(同年一月三日付書翰、同書、二五三―四頁)と明言し、実際にも、そのうちカロザスが明治七年十月十八日さらに、そのころかれの開いていた築地大学の学生を基礎に東京に第一長老教会を創立したのとはほぼ相前後して、ヘボン自身も横浜で自分の教え子たちを基礎に横浜長老公会(住吉町教会)をつくつたのであつた。

それにもかかわらず、たとえばこれまたヘボンの一八七四年(明治七年)二月二十日付ラウリー宛書翰には、「江戸は極めて平靜で、わたしどものミッションの状態にも別に変化はありません。タムソンとカラゾルスとは一緒に働いてい

ません。また三人の婦人宣教師はタムソンに同情しています。」(同前書、二六三頁) などとあつて、決してヘボンがタムソンに悪い感情を持つていたとは思えないばかりか、かえつてタムソンとカロザスの仲を気にしているようにさえ考えられる。しかも、そのカロザスはやがてこのヘボンとも意見の衝突をきたして、ついには長老会を脱退してしまうにいたるのである。もつて、カロザスの協調性を欠いたはげしく頑固な氣質が察しられるであろう。

なお、カロザスの創立にかかる東京第一長老教会については、前掲の「日本基督教会史」(六一頁) に次のごとく要領よく記述されている。

横浜長老公会の設立後一ヶ月、即ち明治七年十月(十八日) を以て、東京第一長老教会なるもの東京築地の外国人居留地内に建設せらる。これプレスビテリアン派の宣教師カロゾルスの努力に成るものにして、最初の会員はその経営に成りし英学校の学生なりき。田村直臣(七年十月受洗)・原胤昭・爪生外吉・戸田三郎四郎等の名士もその創立者の中にありき。新栄公会の高橋亨(安川)も亦転会し来りて該会の長老となり、カロゾルス師仮牧師たり。明治八年一月(五日か) 長老会の管下に入れり。

さて、カロザスは以上のごとく長老教会の宣教師として明治初期のキリスト教界にかなり活発な動きを見せ、一八七五年(明治八年) 四月六日の長老会の集まりではえらばれて会頭をつとめたりもしているが(当日の老会記録参照、「日本基督教会史」、六三―四頁所載)、同年十月五日の会合では「耶蘇」の呼称に関して「ヤソ」説を主唱し、明けて翌年一月四日の臨時老会においても再びこの問題を提出し、執拗に自分の主張を貫こうとしたけれども、ついに成らずして同会を退くにいたつたのであつた。そして、その間の事情は当日の老会記録(同書、六五―六頁参照) によつてよく知られるが、これまでにもしばしば引用してきた「ヘボン書簡集」の中に、いつそうそれをはつきりうかがわせるものがある。すなわ

ち、同年一月十日付のラウリー宛のもの（同書、二七五―九頁）を見ると、こうある。

まず、それは「前回の長老会でカラゾルス氏はこの便でミッシオン本部に辞表を提出する旨発表されました。わたしどもは、同氏に辞表と、その理由とを添えて、長老会を通じ提出するよう要求したのです。」という書き出しにはじまり、仲間のだれもがそれを願つていて、かれとはまったく協力してはたらくことができないと確信していることを述べ、その理由はもつぱらカロザスが「最も徹底した身勝手な頑固な人物だから」であるにほかならず、事ここにいたつた「直接の原因」は単に「イエスの名を日本語で言い表わす方法の問題」でしかないのに、かれだけが頑として会の決定にしたがわないためであるとし、さらに、「ヤソ」なる呼称は一般に未信者の日本人の間に用いられるものであることや、そのよつてきたる経緯を説き、それが本来の発音である「イエス」にかわつてきたのはもはや既定の事実といつてもよい、それを、右の決議後もお、カロザスはあくまで「ヤソ」に固執し、「イエス」の名を用いたものにはその教会で説教をさせず、そればかりか、かれ独自の见解にもとづく出版物を別に刊行すると宣言した、そこで、「この問題について、今月四日の長老会で再検討しました。そして充分考慮してから、再確認しました。カラゾルス氏は、すぐに当ミッシオンを辞任する旨の通告をしたのです。」という次第なのである。しかし、ヘボンにしてもはじめのうちは、内心よもやカロザスが言のとおりに行しようとは思わなかつたようであるが、ついで二月十一日付の同じくラウリー宛書翰では次のごとくきつぱりかれの罷免を要求しているのである。

カラゾルスはますますつむじをまげて、既に印刷されてある聖書にイエスの名をヤソと書いてないという理由でこれを用いないのです。グリーンとインブリーとは彼に何らの関係もなく、同情もいたしません。一月の長老会の会合以来、この事で、これらの二人のいずれもと会つておりません。ミッシオン本部がカラゾルスを罷免して欲しいのです。

彼はこの問題で徹底的に論争するため、ここにふみとどまつている様子ですから、日本を去る意志は毛頭ないでしょう。彼は自分の力を過信しております。いずれインブリーとグリーンとが事件の経過を報告することでしょう。(「ヘボン書簡集」、二八一頁)

要するに、その論争の是非はともかくとしても、結果としてカロザスは孤立し、しかもあくまで我を張らんとし、ついに退会せざるを得なくなつてしまつたのであつた。そのうえ、これを機会にかれは東京第一長老教会から分離して明治九年四月四日に日本独立長老教会を創立したが、間もなく文部省に雇われて、五月には広島英語学校に赴任することとなり、宗教界における活動とは縁を絶つたのである。

ちなみに、右の日本独立長老教会は銀座三丁目の幸福安全社の階上で設立され、銀座教会と呼ばれたもので、原胤昭が同地に経営していた原女学校内にしばらく置かれていて、のち一致教会の設立後二年して、明治十二年四月それに加し、十三年には京橋の新肴町にうつつて京橋教会と改称され、十八年さらに有楽町にうつつて数奇屋橋教会になつたといわれる。

#### 四

かくして、明治九年以降カロザスの語学教師としての活動がはじまるのである。もつとも、かれは教育のことには宣教師時代にはやくも手を染め、築地に子弟を教えて、とりわけ明治六年春には築地大学をまで創立し、かたわら五年六月一日から一年間は当時随一の私学であつた慶応義塾に「英文学科学」を講じたりもした。そのうち、慶応義塾勤務中の事績については、さきに拙稿「カロザスの慶応義塾に対する影響」を発表してあるので、詳細はそれにゆづることと

し、また築地での教育活動についても、やはり拙稿「カロザスの経歴と人柄」にひととおりは述べておいたが、これについてはその後、さらに手塚竜麿氏による東京都史紀要第十六「東京の英学」(昭和三十四年三月刊)や、神辺靖光氏による城右叢書第一輯「明治初期東京の私塾」(昭和三十五年七月二十日刊)等にも論及されるところがあつた。つまり、カロザスは築地に居を定めると間もなくそこに英学の家塾をひらき、翌三年からは特に女子のための学校をも設けて、夫妻そろつて子弟の教育にしたがい、わけでも夫人によるA六番女学校は東京におけるミッション女学校の最初のものとして、まさに女子洋学教育の濫觴をなし、それがいくどかの変遷を経たのち、今日の女子学院の源流となつたのであつた。

ただ、神辺氏はさきに引用した「東京邪宗事情」からの記事中に、英語教授と称してカロザスがバイブルを講じ、それ以外は教えなかつたとあることからして、「彼の意図せる所は神学校であつた。」(前掲書、二五頁)と言明しており、そういうえば、同じく前掲の「東京横浜耶穌教事情書」にもカロザスが新しく学校を建てて、明治五年十月十五日から開講し「毎日バイブル而已教授」したという記事が見られるが、それらはいずれも諜者の報告という点で多少の誇張は免れまい。それに、そのころの宣教師たちの教育方針については、明治七年にA六番女学校に入学して、その年の暮れカロザスから洗礼をうけた渡瀬かめ子も現に「伝道六分教育四分」であつたといつており(「女子学院八十年史」、六五頁参照)、カロザスの宣教師としての職務から考えても、かれの当時の教育上の努力がいずれは教旨の宣布と結びつくものであつたらうことは、もとより想像に難くないが、それでも、その門にはひとえに英学の修得を目的としたものも当然あつたわけで、門下からどのような人々が出たかはすでに拙稿「カロザスの経歴と人柄」中にかかげたとおりである。

そのほか、手塚氏の前掲書によると、たとえば原女学校「家塾開業願」の願出人である渡辺信や、明治五年七月四谷仲町に児童幼児のための私塾培根舎をおこした村上要信なども一時はカロザスに従学したといわれるが(同書、一二五—

六頁、一四二―三頁参照)、前者はともかくとしても、前年芝愛宕下に日新義塾をひらいたりもしている後者の村上のごとき、別に宗教的な影響を特にくけた様子はなにも見られず、その授業科目にもそのようなものは見あたらない。カロザスの意図は意図として、かれの学校が単なるバイブル・クラスでなかつたことは明らかな事実といわなければならぬ。いし、さらに「都築馨六伝」(三〇頁)によれば、カロザスの学校では明治五年十月からは英語のほか、フランス語やドイツ語までも教授するようになったとのことである。そのうえ、カロザスは翌六年春には入舟町に築地大学と称する学校をはじめ、満三カ年の間これをつづけた。おそらく、わが国で大学という名称を用いた最初の洋学教育機関といつてよく、そこに学んだ一人の原胤昭は同校の模様について、こうしている。

築地の居留地が追々開けて宣教師の住居が出来た、六番館にカロゾルスと云ふ米人が居た、海岸本港町にダ、ツ広い校舎寄宿舎を建てた、今のバラック式の安普請、見られたものでは無い貧弱だった。けれども名は素敵に大きかつた、其頃何所にも無い大学、築地大学と名乗を挙げた、生徒は二三百人あつた、こゝで聖書の講義を聴いた。(「私と基督教」、「新旧時代」第一巻第八号、大正十四年十月刊所収、八頁)

施設の貧弱なのはそれとしても、生徒二、三百人というのは当時としてはまことに盛大なものといわなければならぬ。それでは、どうしてそれが三年にして閉鎖されるにいたつたのか。いうまでもなく、前項に述べたカロザスの長老会脱退がその理由であつたと考えられる。あるいは、かれが明治九年ちようど文部省御雇教師として広島に赴任した事実からすれば、廃校の直接の原因がそのようでもあるが、実はA六番女学校廃止ののち広島赴任の五月までに一時、夫人は銀座三十間堀に原胤昭の建てた女学校で教えていたといわれ(「女子学院八十年史」、三九頁参照)、そのあとで夫妻ともども広島に行つていたので、築地大学もA六番女学校と同時にかれらの広島赴任以前に廃されていたものといつてよ



かろう。

そして、明治九年の広島赴任以後、カロザスの宣教ぬきの眞の英語教師としての時代が改めてはじまるわけで、これもすでに拙稿「カロザスの経歴と人柄」にひととおりは述べておいたところであるが、その後、寺田芳徳氏による「御雇外人教師C・カロザス」なる一文が慶応義塾大学経済新人会金融研究部機関誌「金融論ノート」創刊号（昭和三十六年四月刊）に発表され、全般としてはほとんど新しいことがないけれども、特に広島英語学校のことに関しては、カロザスがイギリス人ヘリヤの後任として月給二百円で雇われた事実が「明治以降教育制度発達史」所載の「文部省所轄外国人」表により紹介された。しかも、そのときの同校々長はカロザスが慶応義塾に在職していたのと期に一にして、かれよりも七歳も年少の二十五歳でやはり同塾に教鞭をとっていたことのある吉村寅太郎なのであつた。それから、カロザスは前掲拙稿に述べておいたとおり、この広島英語学校に同年五月十七日から翌十年二月まで在任し、つづいて同年五月一日から十一年一月までは大阪英語学校（のちに第三高等学校となる）に職を奉じ、さらに秋田、仙台等に同じく英語教師をつとめながら、結局なにか問題を起こしたということで、十六年ごろには文部省御雇の任をはなれたらしく、その年のうちに中村正直の同人社に雇われることとなつて、いつたんは手続がとられたけれども実現にはいたらなかつた。

しかるに、明治二十年四月に神奈川県師範学校が師範学校令にもとづき神奈川県尋常師範学校と改称されてからのこと、かれは横浜所在の同校に迎えられ、英語とりわけスペルリングを担当したが、それもあるいは囑託としてであつたともいわれ、同校が二十五年三月に鎌倉に移転するまで五年ほど在職した（神奈川県師範学校「創立六十年記念誌」、五四、五八―六〇、六五、二九四、六一五頁等参照）。しかし、教師としてのカロザスはここでもとかく不評で、当時の教え子の一人岩崎新はかれを「アングロサクソン種の混血種で、米国生れの低級な男であつた。」ときめつめ、「此男が英語教師とし

て教壇に立つと我等は毫も尊敬の念が湧かぬ許りか陋劣感に堪えられぬ拜金者で我国を尊敬せず校長以下職員を侮り生徒の如きは金が無い窮民だとホザクから此方も日本男児豈汝等如き者に辱を受けんやと反抗心ムラ／＼遂にたまらず英



(磯所氏邸盛村岩) 影撮別送生先一ザロカ月三年五十二治明

カロザスと神奈川県尋常師範学校の生徒たち（場所は横浜、伊勢山大神宮の石段で、説明に三月撮影とあるのは五月の誤か）

——神奈川県師範学校「創立六十年記念誌」口絵所掲——

文で彼を排撃した。」（同書、三八一頁）といっている。

まさかその故でもあるまいが、たまたま同校の付属小学校で英語を課するようになったときも、本校にカロザスがいるにもかかわらず、あえて別のイギリス婦人を採用したとか伝えられる（同前書、三五一頁参照）。すでに不惑の四十歳を半ばすぎようというこのころになつて、まだカロザスの圭角ある性格はかわらなかつたものか。それはともかく、明治二十五年度の同校の鎌倉移転にあたり、かれはそこまでは通勤ができなくなつて退職した。そこで、同校の生徒たちは「同年五月八日一二三年は横浜に遠足し伊勢山大神宮の石段で記念撮影をした。」（同書、二九四頁）という。それが同校の「創立六十年記念誌」口絵に載っている上掲の写真で、これはカロザスのうつっている写真の、筆者の目にふれた唯一のものである。

職員名簿のうち、創立五十周年までの在職者中にもカロザスの名が見られ（「Y校八十周年記念誌」、二五〇頁参照）、おそら

く神奈川師範退職後、通勤可能なこの横浜商業につてを求めて雇われたのではないかと推測される。そういえば、かれの神奈川師範就任と同時に同校の教頭として赴任してきた須田辰次郎は慶応義塾でカロザスの教えをうけたことのあるものであり、カロザスが神奈川師範を退職したときには須田はその校長になっており、同じく横浜商業の校長もやはり慶応義塾出身の美沢進で、ことに横浜商業は明治十五年に横浜商法学校として創立されてのち、同二十一年に横浜商業学校と改称され、たまたま二十五年五月からは町立となつてその組織に変更があつたときなのであつた。

### むすび

さて、以上に述べてきたところを、最後にふりかえつてまとめると、カロザスは明治二年に夫人を伴いプレスビテリアンの宣教師としてアメリカから来朝し、当時まだ三十歳に満たぬ若さであつたが、その積極的な押し強い性格をもつて、本来の布教事業はもとより、兼ねて教育事業の面でも、一時は相当にめざましいはたらきを見せ、注目すべきものがあつた。そのうえ、出でては明治五、六年の間、慶応義塾にも教鞭をとり、ことに同九年以降は教会を退いて、あるいは文部省御雇教師として諸地に赴任したり、あるいは私学の教壇に立つたりして、もつぱら青少年に語学を教えたのである。

しかし、その性格は率直にいつて人を導くにはふさわしからず、必ずしも成果をあげ得たかどうか疑わしい。もちろん、その門下にはそれぞれ名をなした人々も出ていないわけではないが、そういう人々からさえ、かれに対する批判の声はしばしばきかれ、人柄、学力ともにあまり重んじられず、真にかれに敬服する人はほとんど見うけられないありさまである。そして、慶応義塾にあつても、かれはたしかに一応の事績は立派にのこしたものの、それがどうもとかく制

度上のことにのみ止まつて、その伝統的な教えや精神にはなんら影響らしいものの一片をもおよぼさなかつたといわなければならぬ。これを要するに、かれは意慾こそ人一倍に持つてはいたものの、ややもすれば、人格、識見ともに、力量がそれに伴わないうらみがあつたといふべく、その点、どちらかといえば、かれは伝道者、教育者といわんよりはむしろ事業家的素質の持ち主であつたといつていゝかも知れない。

それにしても、公平な目で見て、特にはじめの数年間はかれなりのかなり派手な活躍をしていた事実を無視することはできず、それを認めるものももとより皆無というわけではなく、なかでも桜井匡著「教派別日本基督教史」などはカロザスの事績が一般に不当に没せられていることを特に指摘し、同書中の一項「教会組織以前宣教師の活動」のうちに、わずか二頁たらずとはいへ、ヘボン、ブラウン、フルベッキらとならべ、ことさら一節をさいてかれの事績を論じているし、さきに昭和三十五年、日米修好通商百年記念の年には、同記念行事運営会から功労米人の一人として、カロザスも夫人とともに顕彰された。また、それだけの理由はいかにもあつたと思うが、その後半生にいたつては、上記によつて知られる限りではいわばまことに不遇をかこつたものであつたと察しられるし、事実また、はじめの宣教師としてすごした時代よりはその後の教員としての生活の方がはるかに長かつたのに、そのわりにはあまり香ばしい成果が見られなかつたように思われる。

ただ、晩年について未詳な点をのこすのは遺憾である。